

島根県の医史学については、米田正治先生の「島根県医家列伝」、「続島根県医家列伝」、「島根県医学史覚書」がある。本著はそれを補足する形で多くの医師を発掘した。筆者に今後もおこの地方の医師の人間像、業績を追求していただき、米田先生亡きあとの島根県医学史研究を引き継いで欲しいと思うのは、隣県の私ばかりでないだろう。さらなる御研究の進展を望んでやまない。

(森 納)

(〒690-0402 島根県八束郡島根町二七六一、電話〇八五二一八五―二〇六七、A5判、一二〇頁、非売品)

「芸備医事」復刻発刊

『芸備医事』バックナンバーの刊行は、次の諸点において、意義ある事業として注目される可きであろう。

第一点は明治二十九年六月十二日に発行された医学総合情報誌とも言うべき本誌が創刊号より昭和十七年十二月二十五日最終号に至るまでの五五五号が欠号なく完本化され、雁皮紙を使用し、四十七冊と索引号一冊を追加し、本誌の内容は約一九、〇〇〇頁と生れかわった体裁となり、その優れた紙質と堅牢な製本は永久判として特記されなければならない。

第二点としては、本書が当地医学会である芸備医学会から起算して、平成九年で百年の記念すべき年に当るのである。

芸備医学会は節目の年度毎に、先哲の追善顕彰事業を取りあげ、総会次第の中で重要な事業の第一項目に掲げられていて、

その式典と共にその具体化する出版活動が随伴されてきたのである。

当医学会設立の原点の一つとして、まず医の心である医の倫理・道徳律に対する敬虔な回帰哲学と誓が会の開会に先だって厳粛に執行され、先覚者に対する報恩畏敬や医学の歴史についての展示、著述品が芸備医学会の名の下に習慣的に刊行されて来たのである。例えば、会の創立を記念して芸備医学会で発行されたものでは、呉秀三の『東洞全集』があり、その後百年を経て、その伝統を継承して、小川新氏監修『東洞大全集』の発行をみるが如きである。

この地に興った医学会創立百年に際し、当地区に、完全に保管されているべき筈の芸備医事は欠号だらけで活用価値も乏しいことに気付いたのである。地元・広島では公私学校図書館所蔵の『芸備医事』は原爆の災害により煙滅して了った。戦後本書の在庫は広島市外者の本誌寄贈の一部であり、医師会史など編纂する上に、資料的に不備・不便を感じていた。本書は地元のみならず、部数は少くとも全国的に講読されていることが幸いした。

その頃、津下広大名誉教授が岡大図書館鹿田分館の書庫で『芸備医学』創刊号を見つけた、その寄贈者名は赤澤乾一の蔵書印がある。赤澤は広島県北、代々医家出身で岡山医専卒業で秦佐八郎と同級生であり、秦の紹介で富士川游と逢い、私淑するところとなり、芸備医学会岡山支部幹事として大いに活躍し、岡大教授田部浩と共に有名であった。

本書の百年を経ての出会いは先人の手引きのようである。鹿田分館や東大図書館、他大学医学部図書館にも大変お世話になり、復刻事業も進行し、近代的な製本技術と出版使命に献身されたKKコンテンツの尽力により、約六ヶ月という驚異的な短期に終了し、復刻完本の新生振りを、広島医学会総会場に展示し会員にも手にとってみて貰い、中国新聞も大きく報道し、地域の史家にも反響があった。展示の説明文は次のように書かれ、出版は総会に間に合ったのである。

『芸備医事』再生の言葉は次のようである。

広島医学百年を迎えて

名著・芸備医事復版再生なる

明治二十九年創刊より昭和十七年終刊に至る迄五五五号を今年医学会総会に展示供覧し得たことは先人の学恩に些かなりとも報いようとする我々後進の素志であり感激新なるものがある。本記念事業推進援助された各位・富士川游顕彰会・広島県医師会・安佐医師会などで多くの方々の協力を得て、永らく幻であった郷土・本邦の名著を永久版完本として後世に伝えようとするものである。本書は郷土の秀れた文化遺産として広島県立文書館に保管され、貴重な医事文化資料として活用されることを念願するものである。

平成九年十一月八日

索引号・追補 月刊『芸備医事』は今回初めて全号製本されたので、元来本書全号を通しての索引も、一本として発行

ということになる。約一九〇〇〇頁の内容に論説・伝記・史談・医戒・学苑を中心として、医学史関係の外に、雑報は医学会のみならず各地・各界・各支部・会員動静報告があり、医学界の連帯感が強調されている。ドイツ医学の紹介・郷土通信などは史家の興味をひくに足る編集となっている。その中の一項目を探し出すにしても索引は原則的に編集が必要となってくる。このたびは全号を通して、人物・物件別に分類し発行できず、全号の目次の羅列に終ったことは心残りであるが、後日の作業に期待しななければならない。

(江川 義雄)

(芸備医学会発行、索引号は富士川游顕彰会発行・申し込み先、コンテンツKK・岡山市西崎一〇一、電話〇八六一二五五―七八四八、平成九年十一月、A3判、一九、〇〇〇頁、二部一セット頒価税込み九六七、〇五〇円)

志田信男 訳注

『アヴィセンナ 医学の歌』

アラブ医学史のわが国における文献は、通史としては前嶋信次先生の著書、小川政修、川喜田愛郎両先生の西洋医学史中の記述など、高いレベルのものに接することができた。しかし個別史の領域では公刊されたものが少ないので、アラブ医学史の最高峰アヴィセンナ(この表記につき後述)の代表作の一つが翻訳されたことは誠に喜ばしい。しかも綿密なテキスト・クリティークの上に立った高度に学問的な翻訳で、詳し